

【自由研究発表第1セッション 12月6日 10:25-11:00 B会場 526教室】

在日ミャンマー人の民主化運動における非可視的实践と政治的エージェンシー

石川 航

(立教大学 博士後期課程)

本報告は、2021年の軍事クーデター以降に展開された在日ミャンマー人の民主化運動を主題とし、可視化されにくい実践の中に潜む政治的エージェンシー (political agency) の諸相を明らかにする。従来、政治的エージェンシーは抗議行動や組織的動員といった可視的实践に結びつけられてきたが、本研究は、沈黙・匿名・裏方支援・宗教的实践・芸術的表現といった行為にも主体的な政治性が宿ることを示す。

理論的枠組みとして、スコット (1985) の「日常的抵抗」とマフムード (2005) の「価値実践としてのエージェンシー」を参照した。前者は被支配層の非公開的抵抗を、後者は従順や沈黙をも能動的行為として捉える視点を提供する。本研究は両者の視点を接続し、在日ミャンマー人の実践を「支配—抵抗」二項対立の外側で、倫理・感情・可視性の調整を含む複層的行為として分析した。データはライフストーリー調査、参与観察、オンラインアンケートに基づく。

一見、民主化運動に消極的に見える人々も、実際には匿名の寄付や裏方での支援、宗教的祈りや芸術的表現などを通して静かに関与を続けている。そこには「自分だけ安全で申し訳ない」という罪責感や、「小さな行動でも意味がある」という倫理的責任感が交錯しており、感情の回路を通じて政治的行為が生成している。アンケートでは全員が民主化に関心を示す一方、自らを「政治的存在」と認識する者は47.6%にとどまり、意識と行動のズレが「非可視的エージェンシー」としての特性を示していた。

また、「多民族まつり」のような文化イベントは、政治的意識を持たない層にも「楽しさ」や「交流」を契機に支援行為へと導く場となり、日常と運動を架橋する装置として機能していた。これは、抗議や発言に代わる「参加の入口」であり、政治性の閾値を下げる実践として注目される。

以上より、在日ミャンマー人の政治的エージェンシーは、①日常実践 (匿名寄付・裏方支援)、②価値実践 (宗教・芸術・癒し)、③感情の回路 (罪責感・共感)、④可視性の調整 (匿名・頻度制御) という層の組み合わせとして現れる。これらの実践は制度的政治の外側で展開されるが、沈黙や慎重さ、共感といった行為を通じて民主主義を「日常に根づかせる」営みである。在日ミャンマー人の静かな連帯は、制度の外側に広がる政治的エージェンシーの可能性を再考させるものである。

【自由研究発表第1セッション 12月6日 11:05-11:40 B会場 526教室】
マンダレーのメイティ人社会とヤンゴンのナガ系コミュニティ

村上 武則
(中央大学 非常勤講師)

本発表ではインド北東部とミャンマーに跨って分布する集団として、マンダレー市周辺のメイティ人 (Meitei, ビルマ語の他称としてカテー人, Kathe) とヤンゴン市内のナガ系 (Naga) 住民について、2024年と2025年の計3回の現地調査に基づいて報告する。メイティ人はミャンマー国内においてマンダレー市中心の王宮西部に最大規模の集住地を持ち、さらに南方のアマラプラとマンダレー空港の近傍に2つの集落を有している。王宮西部ではインド東部に典型的な(ガウリヤ・ダルマの)ヒンドゥー教が中心で、南方の2集落ではマニプルの在地宗教であるサナマヒ信仰 (Sanamahism)、特に創造神パカンバ (Pakhangba) への崇拝が色濃く残っている。メイティ人は「インドからやって来たヒンドゥー教徒」であってもチン族の下位集団とされ、ミャンマー在地のタインインダー (先住民) に数えられ国内の他のインド系住民とは異なる存在として扱われている。メイティ人の故地であるインド側のマニプル州との人的交流はきわめて限定的であり、ミャンマー側のメイティ人への医療援助や図書館建設などを行う民間団体が存在するがバングラデシュのシレット管区のメイティ人集住地域のようにインド政府とマニプル州からの教育・文化・財政支援などを受けることが出来ず、マニプル州に留学したり文化交流で招聘されたりした経験を持つ人間もごく限られており、メイティ人バラモン (パオナ) の閉じた社会を形成している。マニプル州ではナガ系の少数民族とメイティ人は密接な関係にあるが、ミャンマー側ではタンクル人 (Tangkhlul) やアナール人 (Anal, またはアナン人, Anan) などかつては旧マニプル王国臣民としてビルマ語のかわりにマニプリ語を共通言語として話していた集団であっても現在ではメイティ人との繋がりを喪失しており、インド側に人口拠点を持つチン族の下位集団であるという事実以外の共通項および接点を失っている。マンダレー市内においてナガ系の少数民族諸集団は可視的な組織活動拠点を持っていないようであるが、ヤンゴン市内のナガ系住民はカレン族のキリスト教会組織による支援と協力関係を持ちながら、ザガイン管区内ナガ自治区(SAZ)ソムラー (Somra) 周辺出身のタンクル人牧師らが率いるナガ・バプテスト教会に集い、互いに言語の通じない多民族間でビルマ語を共通言語として「ナガ」としての一定のまとまりを有し、かつインド側のナガランド州に留学生を送り込み教会指導者が研修を受けるなどの人的交流が一方向的ではあるものの活発に続いている。これはマニプル州内でもタンクル人がバプテスト教会の主導的地位を有しているのと並行する現象である。しかしインド側とミャンマー側で言語や習俗がほぼ同じで民族的境界がはっきりしているメイティ人の場合と違ってミャンマー側の「ナガ」とインド側の「ナガ」はそのほとんどが実際には言語も起源すらも大きく異なる異質な集団であり、「ナガ」というコミュニティに対する想像力の在り方と包括の柔軟性が人の動きと関係構築を規定している。